

B04b 社会参加型研究時代の到来と理科教育への意義

山本 真行 (高知工科大学)

しし座流星群を機にアマチュアとプロの連携による幾つかの研究活動が自然発生的に始まり多くの成果を収めた。流星雨というイベント的要素の活用だけでなく、安価で高性能な観測装置やコンピュータ、インターネット環境が普及した時代背景が後押ししたと言える。研究活動のアマチュアへの広がり、一般市民が生現象に触れる機会を増やすことに繋がり、長期的な視点から理科教育にも寄与できる。

我々は、しし座流星群の5年間、すなわち1998年～2002年にわたり流星痕同時観測キャンペーンを進めてきた。観測目標を限定した分かりやすい観測マニュアルにより、アマチュア観測者に観測の裾野を広げること成功し、2001年には人類史上最大の流星痕サンプル画像の取得に成功した。また高知工科大学においては、3年生の学生実験に際し、アマチュア天文家から提供された惑星画像をサンプルとした最適なコンポジット方法の研究など画像処理をテーマとした実験を、生のデータをもとに行なっている。

これらアマチュア観測者あるいは一般市民が「参加」可能な研究活動を、ここでは「社会参加型研究」と呼ぶこととする。社会参加型研究の例を紹介し、今後のプロアマの連携、さらに地域社会の教育への寄与について議論したい。